

真夏のような暑さ、東南アジアのスコールのような雨。そんな天候の中でも、大地の入り口では、例年のように赤い実りのリンゴたちが迎えてくれる季節となりました。昨年と違うのは、リンゴのアーチではなくて、片方だけとなり、左手には、大地が見える光景です。そして、大地への花壇の花々が豊かに咲きほころび、春先から、長い事、文字通り、大地へのアプローチに花を咲かしつづけています。また、昨年の春に、皆で植樹した桜やしだれ桜も、ほとんどが根付きました。(名札が今でも付いていますので、時々でも、支柱の点検や根回りの草取りなどをして、その成長を確認すると楽しいですよ) 手間暇かけて、愛情を注ぐことを実感した夏でした。

リンゴや田んぼの実りの風景と共に、大地の2学期 秋が始まりました。そして、大地の入り口に突然建物が建っており、そこに青山家の長男が加わり、活気づき、更に、突然の次男の雄河の乱入で、更に勢いを増した幕開けとなりました。家作り 登山準備 登山 鼻見城址登山 給食 など、ここ数日の大地での生活も、雄飛君などがかなり盛り上げてくれて、子どもたちにとって最高の2学期のスタートになっています。

秋の好天が安定して続くことを祈りながら、自然と子どもたちの実りを期待していきたいと思っています。



【あまちゃん】

「高い山に登らせよ」「電車の中では立たせろ」「雨の日でも迎えに行くな」「遠くても歩かせよ」「家の仕事はやらせよ、なくても探させよ」 きっと母親や主婦など、母性原理には受け入れられない言葉だと思われるが、我が家では、ドイツの子育てから学んだ事を、父性原理から実践してきました。大地にも、本(日本の父へ)がありますが、グスタフ・フォス(神奈川県栄光学園の元理事長)というドイツ人の考え方に学んだ、育て方です。その陰で、こっそり妻が、母性原理で例外を作っていたことは承知で、絶妙のバランスを保ってきましたが。詳しくは、雄飛から聴いてください。

末っ子の野球部の1年生保護者での懇親会が先日ありました。「雄和、どうやって通っているのかね?」「自転車ですよ」と答えるだけで「大したもんだね」と驚いてくれる。それも父親たちが。「野球部でしょ。そんなこと当たり前ですよ」と言う、「おらん家も、そうしろと言っても 送ってくれと言って聞きやしねえ」「家 どこですか」「学校から2,3キロかな、まあ、甘ったれでしょうがねえ」.....

そんな人達に、テレビやゲームがなかった話や新聞配りの話などの我が家のエピソードを話すと、「信じられない」とか「えらい厳しい家」だとか「そんなことしたら、子どもにえらい目に合わされる」とか「おっかなくて、そんなことできない」などの言葉が並んでくる。どうしたら、そんな子になるのかというような質問をされるが、それには答えようがない。それは、どんな親であるのかという自問自答であり、残念ながら、高校生になった今では、もう手遅れであり、幼少期になすべきことををしないが無理だと思ってしまうからです。

子どもは、本質的にネガティブな感情を持って生まれてくると思います。心地よい事だけ、自分の思い通りになることだけ、うれしい事だけ、自分の満足する事だけ、何でも欲求を満たしたいだけ.....。逆に言えば、我慢したくない、耐えたくない、すぐに手に入れたい、欲求をすぐに満たしたい、苦しいことはいや、思い通りにならないことはいや、大変なことはいや.....。これらは、人間の持つ根源的な性だと思います。

佐々木正美著「子どもへのまなざし」で、子どもの要求や眼差しをすべて受け入れましょう、を文面通りとってしまおうと、子どものわがままやネガティブな感情を全て受け入れ、子どもの言葉通りを実践してあげましょう となってしまう。そして、子どもにとって、苦しい事、楽しくない事、思い通りにならない事、わがままを満たしてあげない事、自己主張をはねのけること、これらは、全て、良くない事だと思ってしまう。

高い山より低い山の方が楽だから、子どもは、必ず楽な方を選びます。電車では、座った方が楽です。雨で濡れるよりも、車で迎えに来てもらった方が快適です。歩くのは辛いので、車で送ってほしいです。これは、子どもの当たり前前の感情です。大人だと、高い山の方が感動が大きいとか、トレーニングのために立つ、走って行くほうが良いと、先を見据えて、それによる価値を考えて行動します。ここに、子どもと大人の違いがあります。これを教えるのが、生きる力の教育だと私は考えます。ここを見据えて幼少期から、子どもに対する親の在り方を考えていかないと、高校生になっても、楽な方を要求し、そして、親も、小さい頃から、子どもの要求の従ってきたので、それに従い、強いことを言えない、価値を見出してあげられない構造になってしまうと思います。

幼児を見ていると、日常茶飯事です。いつでもどこでも水が欲しい、のどが渇いた、何か食べたい と言います。「我慢しなさい」ではなく、すぐに何とかしてあげたり(コンビニの発達で更に輪をかけています)。子どものリュックサックを持ってあげたり、暑い寒いからとすぐに洋服を着替えさせてあげたり、手荷物を持ってあげたり、かわいそうだからと仕事をさせなかったり、当然できる力(気分だけ)があるのに、それを子どもの言葉や大人の思い込みだけで、本来の子どもを力を引き出せないもったいない場面や、親子関係を構築するチャンスを逃している場面も多々あります。これらは、楽な生き方、楽しい安楽な生き方、自己本位の生き方、子どものままにネガティブに生きる、そして、親にいつまでも保護して欲しい自立できない大人になってしまうような気がします。

イチローの語録が良く注目されますが、先日 巨人やヤンキースで活躍した松井の言葉が印象的でした。「..... 結局、学んだ事は、人生は忍耐です」 苦しい事に絶える 親としては、子どもに1番やらしたくないことですね。

幼児に苦しい重労働を強いる、耐えさせることは必要ありません。苦しい山登りをひひやらせる必要もありません。それらの深い意味と将来の価値をしっかり把握したうえで、それらをファンタジックに気分を乗せて、その機会を与えてあげるのが大切です。大人が、大変だから持ってあげようとか、苦しいからやってあげるとか、つまらないからやらなくていいではなく、そのチャンスを幼児にメルヘン的に与えてあげることが重要です。時には、もちろん、我が家ではやらねばならない、という厳しい掟やルールも必要です。この親子関係が、将来大きく影響します。

先日 雄飛と雄河が2人同時に保育に入りました。雄飛には、やんちゃな男の子達が群がります。雄河には、女の子たちが群がります。雄飛「俺は、子どもができるのにやると言ってきたも、自分でやれ」と言うし、雄河は、優しいので、何でも優しくやってあげるから」とさすがに大人の分析をしていました。2人とも、それぞれの立場をわきまえている会話を聞いて、大人になったなあと感心しました。そして、私達夫婦の育て方を、上の3人は、ものの見事に、現在 おちゃらけて、笑いながら話せる年齢となっています。まだ、末っ子だけは、その最中で思春期です。

NHKの朝ドラの人気番組「あまちゃん」は、我が家では「甘ちゃん」としてヒットしてほしいです。